高度グローバル人材育成拠点としての側面を生かした、マドリッド日本人学校の学校運営

前在スペイン日本国大使館付属マドリッド日本人学校　教頭
北海道北斗市立上磯中学校　教諭　平　方　雅　之

キーワード：学校運営、学校経営、日本語、母語、マドリッド、インターナショナル校

１．はじめに

欧米の日本人学校は、他の地域の日本人学校より生徒数が少ない。とりわけ、本校、すなわちマドリッド日本人学校においては、小中学生を合わせて20数名という小規模校であった。なぜ、そのような傾向があるのか。多くの原因は、現地在住の日本人家庭の保護者が、その子女を日本人学校へ通わせないからではないだろうか。

例えばマドリッドの場合、３～４年間の出張で来た日本人家庭は、子どもを日本人学校に通わせるより、英語を話せるようにさせたいと考え、英語が主で授業が行われるインターナショナル校やアメリカン（またはブリティッシュ）スクールに入学させる場合が多い傾向にあったと感じている。

今回は、小規模校で存続も危うかったマドリッド日本人学校が、高度グローバル化人材育成拠点としての側面を売り出し、生徒数が増えていった事例を整理していきたいと思う。

２．マドリッド日本人学校の現況

(1) 児童生徒数

私が赴任する前は10名台後半で推移し、私が在籍したころは20名台前半を推移するなど、2002年を皮切りに30名を超えたことはない小規模校である。学校経営上、25名以上在籍し授業料をもらわないと黒字にはならないという状況で、数年赤字経営が続いていた。この１，２年で黒字経営に転換しなければ、経営資金が足りなくなる恐れがあるということで、在スペイン日本国大使館からも閉校も余儀なくされると言われていた。

(2) 児童生徒数増をねらいとした、今までの取り組み

①短期入学制度の導入

１～４か月の期間での短期入学の制度を取り入れていた。スペインの現地校に通う児童生徒の保護者が、短期間で日本人学校の教育制度のもと学ばせたいと考え、入学させていた。毎年、夏の期間に通ってくる児童生徒もいる。さらに、この短期入学の期間の経験が好評を得て、そのまま正規入学する場合も何例か存在した。

②夏季体験入学制度の導入

これも臨時の入学制度。６月の最終週から７月の２週目までの約３週間のみ、体験入学の児童生徒を受け入れていた。ちょうど現地校の児童生徒が夏休みに入る期間で、多くの日本人や日系スペイン人が利用していた。毎年、20名以上の利用者がおり、この時ばかりは校舎内に40名以上の児童生徒の声がこだましていた。

(3) 高度グローバル人材育成拠点の側面を生かした、児童生徒数増の取り組み

日本式教育の海外展開

①授業や学校行事

本校では、やはり保護者から英語教育充実の要望もあることから、小１から中３までネイティブの先生による習熟度別「英会話」の授業を週２時間取り入れている。また、「スペイン語」の授業も同じく、習熟度別で取り入れている。こちらは低学年児童で週２時間、高学年児童・中学生で週１時間である。

また、芸体系の教科である、「音楽」「図工・美術」「家庭・技家」「体育・保体」も、現地校やインター校にはあまり存在しないもので、こちらも日本式教育の一環として、力を入れている。

そして、学校行事として「運動会」･「文化祭」の取り組みも、現地校ではあまり見ないものであろう。「運動

会」では、日本人会や地域の方々、補習校の児童生徒を巻き込み、盛大に実施している。また、「文化祭」でも児童による「スペイン語による発表」や中学生による「英語劇」など、日本では見られない、在外教育施設ならではの演目を用意し、工夫を凝らしている。

②清掃活動・給食活動

本校では、日本式教育の代表的な事例のひとつである、「清掃活動」もしっかり取り組んでいる。毎日、帰りの会の前に全員で自分たちの教室や廊下をきれいにする取り組みは、日本ならではのものである。現地の学校では、清掃活動は業者が行うものと決まっている。自分で使った教室は自分できれいにしようという姿勢を身に着けさせようというこの取り組みは、スペインの中でも注目されている。私が在籍している最中も、マドリッドのテレビ局が取材に来て、30分の特集番組が放送された。

同じくそのテレビ局が取材をしていったのが、昼食の様子である。スペインの学校の昼食は、学校に入っている業者による食堂で食事をするか、家にいったん帰宅して済ませるというタイプである。日本人学校は、ほぼ毎日、各家庭から保護者手作りのお弁当を持参してきて食べている。また、週に１回デリバリーサービスを活用し、和食・中華・スペイン料理のメニューを「給食」として取り入れている。もちろん、届いたものを皆に配るときには、給食当番制をとり、自ら配膳作業を行っている。これも、児童生徒が自ら食事を用意する取り組みとして、番組で紹介された。

中学部による職場体験学習

中学部による職場体験学習も、一斉にある企業等に訪問をし、講話を聴いたうえで簡単な仕事を体験させていただくということを実施していた。私が在籍した３年目からは、生徒を３グループに分け、実際に各受け入れ先に分かれて仕事を手伝わせていただいた。スペインでは移民者による不法就労問題もあり、いろいろと配慮しなければならないこともあったが、何とか実現できたことは、一歩前進の取り組みであった。

③放課後活動の有効活用

児童生徒やその保護者からの要望を受け、私が在籍した２年目より、放課後の教室を活用し、ブリティッシュスクールの先生を招き、「放課後英会話教室」を開講した。１年間を単位に週２日間、習熟度別にクラスを設けた結果、英検の合格者もそれを実施する以前より、大幅に増えることとなった。

また、これはまだ実現には至っていないが、長期滞在者や日系人の児童生徒を対象として、「放課後日本語教室」も検討中である。その保護者も含め、必ずしも日本への帰国を前提としない児童生徒に対して、日本語教育の支援を通して、国外における我が国の理解者を増やす取り組みのひとつとしたい。

さらに、これは以前から行われていたが、週１回の「部活動」も実施している。小学部と中学部に分け、小学部はボールゲームを中心とした様々な運動を、中学部は当時の派遣教員の指導経験を活かし、年間を通してバスケットボールの練習を行った。他校との練習試合までは実施できなかったが、年度末の先生たちとの対抗試合は大いに盛り上がった。

④その他

この日本人学校の経営健全化には、学校運営委員の協力がなければ成り立たなかった。教育に関してのことは、派遣教員が中心となり様々と協議し、改善への方策を考えたが、それ以外の部分でビジネスの最前線に立つ彼らが、いろいろなアイデアを出してくれ、学校がいい方向に向かったといって良い。

日本人学校を会場とした日本文化の発信。これは、地元の日本人会の方々に会場を貸しただけだが、「盆踊り大会」と「餅つき大会」の実施。いまやスペイン社会にも広く周知され、多くの来場者が訪れるようになった。また、日本人会主催のソフトボール大会の練習会場、マドリッド水曜会という日本企業の方々の設立した会の

方々が中心となって開催しているバスケットボール同好会の練習会場、漢字検定や英語検定の受験会場など、様々な団体に広く会場を提供した。

また、広く日本の在外教育施設の活動に、理解と協力をしてくれる方々に、寄付の呼びかけをさせていただき、多くのご支援をいただいたことも大きかった。また、3年間中止せざるを得なかったスクールバスも復帰させ、学校から少し遠いところに在住している方にも通学するチャンスを広げたことも効果的であった。

マドリッド日本人学校存続のため、一丸となって関係者が努力をした結果、しばらく続いていた赤字が黒字へと転換でき、多くの方々に在外教育施設で学ぶ機会を提供し続けることができるようになった。

日本人学校を会場とした盆踊り大会

３．学習言語としての母語である日本語を習得するには、日本人学校が一番

①論理的思考を培う母語学習

先程、マドリッドに海外出張で滞在している保護者はその子どもを、インター校やアメリカンもしくはブリティッシュスクールに入れる人が多いと書いたが、のちに日本に戻るであろう海外出張者の子女は、日本人学校に入れるほうが良い。それは、英語を習得させたいという要望をかなえるためにも、日本人学校のほうが好ましいと考える。特に低学年児童においては。以下に、その理由をまとめていきたい。

低学年児童は、言語を確立していく時期である。生活していくうえで必要なことばである「生活言語」は約２年で習得できると考えられている。しかし、生活を離れ、物事を論理的に理解したり、あるいは自分で論理を組み立てたりといった、抽象的な概念について考えられることば、いわゆる「学習言語」の習得には約５年かかると言われている。小学校低学年から中学年にかけて、思考していく土台づくりをしっかりとしておかないと、いつまでたっても抽象的な思考ができるようにならなくなる。小学校で現地校に行き、数年たって現地語をペラペラしゃべっているように見えても、実は全然文章が読めなかったり、論理的な思考ができなかったりすることが多々あると言う。

その抽象的な思考の土台づくりのために必要なのがことばだ。この時期を、ことばによる土台づくりができずに過ごしてしまうと、母語も第二言語もペラペラ話せるけどどちらの言語でも抽象的な思考ができない、いわゆる“セミリンガル”（あるいは“ダブルリミテッド”）という状態に陥ってしまう危険性がある。

そうならないために必要なのは、どちらかの言語で抽象的な思考の土台を作るということである。小学校低学年から中学年であれば、母語の生活言語はほぼ習得できているだろう。そのまま日本語で思考能力をつけさせようと思えば、やはり日本人学校が適しているというわけである。

その年代の子をインター校などに入れる場合は、親がまずはたくさん日本語を浴びせかけ、さらにたくさんの日本語の本を読ませたりするほか、塾などに通わせて日本語でも教育を受けさせ続ける必要がある。これは子どもにもかなりの努力を要することになる。

日本人学校であれば、小１で週９時間、小２で週７時間の国語の授業がある。これに勝る日本語学習はありえないと考える。また、日本ではなく海外の地に在住しているのであれば、学校以外でも英会話を学習する場はいくらでもある。日本人学校で学習言語としての日本語の能力を伸ばしつつ、現地の英会話教室に通い、現地の友だちを作り、過ごしたほうがベターと考える。

②９歳の壁

「９歳の壁」という言葉をご存じであろうか。英語では、「Grade4（４年生）の壁」と言われている。言語形成

期が、この「9歳の壁」を境に、前半と後半に分かれるということである。

0歳から4歳まで。この時期に親が話しかける言葉に応えるという形でことばを話し始める。その後4歳から8歳まで。これが会話力が定着する時期である。海外で子育てをする場合、8歳まで日本語での会話力を保持することができれば、のちに会話力が失われる心配はないと言われている。

会話力の基礎の上に、文字の習得があり、その上に読み書きが加わってくる。文字の習得は4歳ぐらいから始まり、9歳の壁までが基礎の時代。ここまでが言語形成期の前半である。

9歳の壁を越えて、言語形成期後半になると、読んで理解する読解力や意味のあることを作文力、聞いて理解する聴解力などが、学校の授業の中で取り入れられていく。日本語の場合、会話で使わない漢字熟語も入ってきて、この9歳の壁は非常に高いハードルとなるわけである。9歳を超えて15歳に向けて、論理的な思考を伴う言語能力を身につけていくわけだが、9歳までの間に母語の基礎が身についている人と、身についていない人では、その能力の伸びに大きな差ができる。基礎ができている子は、15歳くらいまでにネイティブの子に追いつくようだが、基礎ができていない子はネイティブの言語能力を習得するのに、17歳くらいまでかかるだろうと言われている。

上記の理由から、9歳までつまり、低学年児童までの間は、しっかりと母語である日本語を、日本人学校で学ぶことがより望ましいと考えるわけである。

4．おわりに

在外教育施設である日本人学校の良さは、まさしくグローバルな人材を育成できることである。日本語を母語とし、さまざまな人種の人たちと接しながら、現地社会の中で生きていくには、それ相応の適応力がなければならない。

私は日本式教育のエッセンスの詰まった日本人学校を卒業していく子たちが、日本人の良さである思いやりにあふれ、高い道徳心を身につけ、そこに多様性を受け入れることのできる柔軟な感覚をもったグローバルな日本人へと成長してくれることを期待してやまない。

これからの時代、日本人学校のもつ、高度グローバル人材育成拠点としての側面をどんどん生かしていきたい。そのためにも、日本を出て国際的な分野で活躍する大人には、安易に現地校や、インター校などに自分の子どもを預けるのではなく、きちんと母語である日本語の基礎を身につけさせてくれる日本人学校へ、入学させてほしいと切に願う。